

インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.239

2025年5月15日

発行所 兵庫教育文化研究所
〒650-0004
神戸市中央区中山手通4-10-8

「施設で生活する子どもたち支援研究会」から「社会が育てる子どもたち支援研究会」へ

伊藤 嘉余子（大阪公立大学学長補佐/現代システム科学研究科教授）
(兵庫教育文化研究所 生活指導部会 協力研究所員)
(同 社会が育てる子どもたち支援研究会 共同研究者)

2025年3月に開催された兵教組第155回定期大会において、研究会および実践交流集会等の名称で用いてきた「施設で生活する子どもたち」、「家族を頼れない子どもたち」という表現を「社会が育てる子どもたち」に改めることが承認されました。この名称変更にむけた議論のきっかけは、2023年の実践交流集会に登壇した畠山麗衣さん（社会的養護経験者：NPO法人Giving Tree ピアカウンセラー）からの『家族を頼れない』という表現を使わないでほしい」という提言でした。

保護者の死亡や行方不明等で保護者がいない子どもや、保護者に監護させることができない子どもを、公的責任で社会的に養育し保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援をおこなうことを社会的養護といいます。現在、約42,000人の子どもが、社会的養護のもとで生活しています。施設種別によっては、施設敷地内に小・中学校の分校・分教室をもっている施設もありますが、多くの子どもたちは、社会的養護の担い手である施設・里親家庭から地域の学校に通学します。

子育ての第一義的責任は親にあります（児童福祉法第2条、児童の権利に関する条約第18条）。しかし、親がその責任を果たせない時、国・地方自治体がその責任を果たさなければなりません（児童福祉法第3条）。私たちが「家族を頼れない」という表現を用いてきた根拠はここにありました。しかし、この視点は「支援者側の視点」であり、「家族を頼れない人」という言葉で括られる人たちの心情に十分寄り添つものではなかったことに、畠山さんからの指摘で気づかされたのです。

「頼れない」、「できない」という表現には、そう言われる人たちの中に、何か欠落したものがあるという印象を与える要素があります。もちろん、本人の責任ではないこと、「家族を頼ることができない」ことが本人の能力やスキルの問題ではないことを私たちは知っています。しかし、「家族を頼れない」という言葉には「みんなが当たり前にもっているもの（=頼れる家族）をあなたたちはもたない、生きていくために必要な何かが足りない人たち」というニュアンスがあり、違和感を覚えることを「そのキーワードで括られる私たちの声」として畠山さんは表明してくれたのだと、私たちは受け止めました。

では、私たちのミッションや問題意識をどんな言葉で表現したらいいのか。団体の名前もイベントの名前もとても大切です。議論を重ねる中で、私たちは「支援すべき対象である子どもたち」という視点に捉われすぎていないかという疑問が生じました。子どもたちに不利なことや苦手なこと等、いわゆる「支援ニーズ」があるから何かをするのではなく、「私たちが、社会の一員としてすべきことは何か」に焦点をあててはどうかと考えました。こうしたプロセスを経て採択されたのが、「社会が育てる子どもたち」という表現です。

そして、もう1つ、こだわったポイントがあります。「社会で育てる」ではなく「社会が育てる」とした点です。単に「地域社会という場の中で育てる（care in the society/community）」という意味ではなく、「地域社会の子育て力を向上させていく」という意味を込めて、「社会が育てる（care by the society/community）」という表現にしました。「社会の力で子どもたちを育てていく」という意味です。

「社会」とは、単なる場・空間ではなく、私たち一人ひとりも「社会」なのです。社会を構成する人たちが誰も「子育ての傍観者」にならない、一人ひとりが、子どもの育ち、子どもの声を「自分ごと」としてとらえ、考え、行動していく社会をつくっていきたい。そうした思いを「社会が育てる子どもたち」という表現に込めました。

「社会が育てる子どもたち支援研究会」は、社会で生きるあらゆる子どもたちの応援団として、代弁者として、支援者として、養育者として、教育者として子どもに寄り添い、子どもとともに生きようとするおとなを増やしていくよう、これからもさまざまな活動を展開していきます。「子どものために（for children）」から「子どもとともに（with children）」。福祉、教育、医療、保健などあらゆるもののが「子どもとともに」そこにある社会を一緒につくっていきましょう。